

近代・男性・同性愛タブー

— 文明、および倒錯の概念 (1) —

渡 辺 恒 夫

(人文学部 心理学研究室)

Modern Age, Male and Homosexuality Taboo

— On Civilization and Concept of Perversion (1) —

Tsuneo WATANABE

(Laboratory of Psychology, Faculty of Humanities)

日に増し世界に弘まって行く良き趣味はもと
ギリシアの蒼空の下に形を成し始めたもので
ある。

—ヴィンケルマン⁽¹⁾

第 1 節

同性愛の秘密は男性の秘密に深く通じている。同性愛研究は男性存在の奥処へいたる王道であり、そしてただ男性とは何かを真に会得しえた者のみが、同性愛の本質とその隠された意味について正しく語ることができるのである。

巷に女性論・女性心理学の名を冠した書物のあふれるのに対し、男性論・男性心理学の名を見ることは稀であり、よしあったとしても常識的なものを出ない。他方では〈女性学〉なる新分野の登場さえ喧伝される活況とは対照的に、対を成すべき〈男性学〉の提唱されるのを、一向耳にすることもない。

しかしながらこの現象は、一般的な意味で男性が女性よりも〈謎〉の少い存在であることをさし示している訳でもなければ、男性自らにとっての男性が、女性自らにとっての女性よりもより多く照明されていることの表われでもない。そもそもこの種の問いかけがなされるためには、少数者意識が、マイノリティ・コンプレクスが必要である。大多数の男性にとっておのれが男性であることは自明のことであり、男性 man が人間 human を代表することも自明のことである。彼は性別不明の人間論や人間心理学に自己の姿を映し、性別不明の人間論や人間心理学に自己の姿を認めて以って事足りりとする事ができる。しかしここにおのれの男性としての在り方が、〈存在様態〉 Seinsart が、男性一般とは画然として違っていると感ぜざるをえない一群の人びとがおり、彼らにとって社会や道徳の要請するごとき〈男性〉であり続けることは、往々にしておそるべき苦役となってしまう。彼らはもはや人間論や人間心理学に男性としてのおのれを認めることができず、男であること自体が生涯にわたる謎と化してしまい、世の常の男たちが〈女性の神秘〉について語ることを好むように、ついには〈男性の神秘〉について語りたいと願うにいたるだろう。かくしてアンドレ・ジッドや稲垣足穂のような、同性愛を芸術の上でも実人生の上でも一個の主題と化したすぐれた文学者らは、同性愛論であると同時に卓抜な男性論でもあるような著作を遺し、後世の研究者に貴重な手掛りを与えることとなったのである。

そもそも男性が〈男性〉であること、男性としての意識・性格を保持し、社会的にも男性として

認められるふるまいをすること、精神分析学者の好みの表現を借りるならば、男性としての性同一性 sexual identity^(註)を身につけることは、一般に考えられているようにはけって自明なことで、またたやすいことでもないのである。それどころか少くともわれわれの社会においては、男性があやまず〈男性〉として成長することは、女性があやまず〈女性〉として成長することよりも一層困難であると考えべき、いくつかの証拠が存在する。

註 性別同一性 gender identity の語の方が適切かもしれないが⁽²⁾、ここでは区別せずに広義に用いることにする。

そのひとつは、近年欧米先進諸国でとみに注目を集めているいわゆる異性化願望 transsexualism の発生が、男性の側に多く見られることである。異性の肉体と役割とをともども羨望するあまり性の転換を真剣に企てるにいたり、あるいは手術を強要して外科医を悩ませ、あるいは性器を自傷して死に及ぶものもまれではないという、このあらゆる〈倒錯〉の中でも最も悲劇的な倒錯の男女化については、二対一から八対一にわたる様々な報告と推定の試みがあり、隠当なところで四対一と推測されるのである⁽³⁾。この比率は、われわれの社会が男性優位の社会であり、従って女性の男性化願望にとってこそ都合のよい土壌とみえるということと考え合せてみれば、一層驚くべき現象であることが納得されるだろう。女性の男性羨望はさして恥とは見なされず、ある場合には正当化さえされる風潮にもかかわらず、破局にまで通じる真の異性化願望はまれであり、一方男性は、嫌悪・嘲笑・非難等のありとあらゆる〈負の社会的強化〉にもかかわらず、より容易に異性化願望を発達させる傾向を持つのである⁽⁴⁾。

このような男女の差異は、ただに異性化願望においてだけ認められるものではない。普通の同性愛でも^(註)、男子のそれがより一層社会の非難的になりやすいにもかかわらず、その数は女子同性愛 Lesbianism の二倍から三倍に達することが、今日ひろく認められるところとなっている⁽⁵⁾。フェティシズム、視見症、露出症、服装倒錯などにいたっては、大多数というよりはほぼ百パーセントが男性であり、極言するならば、〈変態〉とは本来男性にのみ向けられうる貶称であり、性倒錯の問題とはもっぱら男性の問題である、とさえ言っているのである。

註 一般には混同されることが多いが、同性愛と異性化願望とは、全く異なる範疇に属する。第2節参照。

このように〈性倒錯〉が圧倒的に男性に多発することについては、男性の方が観念的だからとか、想像力が豊かだからといった類の説明がなされるのが普通であるが、実は男性の性同一性が女性のそれよりも不安定であり、獲得するのに一層困難で従って形成過程もより複雑であることを暗示していると見なすべきものである。フロイトは「幼い女兒が正常の女性に発達するのはより困難であり、より複雑である」⁽⁶⁾と説いたが、これは、性別を問わず幼児の性生活を本質的に男性的・能動的とするいまひとつの知見を前提としたもので、自由自立能動的な個人——すなわち〈男性〉——のみを人間一般にとっての本来的な、真正な在り方と偏見する、近代西欧の文化的背景抜きには考えられないものである^(註1)。土居健郎はその示唆するところの多い〈甘え理論〉⁽⁷⁾のいたる処で、フロイト及びその後継者である欧米の精神分析家達がいかに患者の隠れた受身的欲求に対して盲目であり、とどのつまりは受動性を蔑視し一方的に墮落と断罪する近代のイデオロギーに深く抱えられているかを指摘している。もしこの土居やバリント⁽⁸⁾のように、愛されたいという受身的欲求を原始的な欲求として承認し、その後の対象関係の形式はむしろ二次的なもの、後天的社会的影響の産物である、という見解を採るとするならば、フロイト説とは逆に精神性的 psychosexual 発達における主要な困難と障害は、まさしく男性の側にあるはずである。幼児の性生活を受動性によって、そしてまた女性の性生活をも受動性によって特徴づけることが許されるとするならば、〈幼児〉から〈女性〉への移行は、〈幼児〉から〈男性〉への移行よりもかえって容易におこなわれう

ると考えることができるからである^(註2)。人類学者マーガレット・ミード⁽⁹⁾によって強調されたとき、役割の摂取と同一化の過程で男児に負わされるハンディキャップがこの困難に拍車をかけるであろう。彼女によれば女性は男性に比べ（妊娠・出産を中心とした）その生物としての経験から容易にかつ確実に自己を社会の他の同性と同一化させえることになり、また女性というカテゴリーの持つ特質、女性としての役割を、無理なく自然に自覚することが可能になるのである。さらに、殆どの社会で育児が母親によってなされるという事情が、男児を女児とはこれまた全く別の問題に直面させるということにも、注意が払われねばならない。「女性が女らしさを学ぶためには母子分離を強く経験する必要はないが、男性が男らしくなるためには母子分離をうまくやりとげねばならない。」（ストーリー）⁽²⁾「もしも男性の性と同一化を欲するなら男の子は重要な点で母親とは別のものになっていかななくてはならず、接することのはるかに少い男性と同一化しなくてはならない。この課題の困難さは、私の臨床経験によって確かめられるように思う。すなわち男性は、女性が女らしくあるよりずっと不確実に男らしくあるのである。」（グリーンソン）⁽¹⁰⁾ それゆえ〈正常な男性〉などというものは、〈正常な女性〉に比べはるかに人工的産物と言わなければならない。シモーヌ・ド・ボーヴォアール⁽¹¹⁾の有名な言葉「女はつくられる」は、実は「男はつくられる」によって先行されなければならなかったはずである。

註1 「小さい女の子は小さい男の子」⁽⁶⁾とし、〈男の子〉から〈女性〉が派生して来るがごとく説くフロイトの議論の奇妙さには、また、アダムの肋骨からイヴが派生したとするヘブライ＝キリスト教創世神話をも連想させるものがある。

註2 マルクーゼは、抑圧以前の幼児期を受動性によって、抑圧に充ちた成年期を生産性によって特徴づけたフロイト理論を再構成するという壮大な企てである『エロスと文明』⁽¹²⁾の中で、「抑圧なき社会が実現した場合、まずすべての性感帯が復活し、ついで性器以前の多様な性欲が復活して、性器の復位が失われる」と例によって予言者口調で語っているが、この〈予言〉は、マルクーゼの解放を待望する一層強い動機が男性の側にあることを自ずとさし示している。神経分布の生得的差異といった解剖学的神話をもち出すのでなければ、成人男性における、女性の場合に比べはるかに広範囲にわたる、身体表面の〈脱性化現象〉とは、男性の側に〈過剰抑圧〉が一層強力に作用した結果と見なさざるをえないからである。

第 2 節

性の科学が登場したのは、ブルジョアジーの覇権によってその自由の哲学が、前代の価値観に対して最後の勝利を収めた、十九世紀半ばという時期のことであった。人間は——とりわけ男性は——生まれながらにして自由な意志、自由な精神であり、自らの力で立ち社会や自然に主体的かつ能動的に働きかける存在でなければならなかった。貴族の時代に重んじられた〈名誉〉や〈典雅〉といった価値にはもはや二義的・三義的な意味しか認められず、〈美〉は女性向きとして男の世界から追い立てをくらった。とりわけ受動性は——それがキリスト教聖者の重要な性格特性であったにもかかわらず——蔑視された。性愛（エロス）の領域においても事情は同様であった。男性が他の男性の眼に受動的な肉として、欲望をそそる美的な客体（もの）として現象するという、これほど人間の——すなわち男性の——尊厳を傷つけることがほかにあろうか。モーゼの掟に照らしてみないまでも、その唾棄すべき本質はあまりにも歴然としているのではないか——。かくして性の科学は、キリスト教的倫理に抗し、同性愛が道徳上の〈罪悪〉ではないことを強調しつつも、同性愛者を〈男でない〉男、男の皮を被った女、自然の錯誤、と見なすことによって正常者の世界から排除するという、あらたなる戦略を見出したのであった^(註2)。性の科学は、頭初から、ブルジョアジーの〈自由の哲学〉に依拠し近代の人間像・男性像を擁護し聖別すべく、同性愛者を臨床カルテの中に封じこめんと発動された〈近代イデオロギー〉、一個の似非科学として出発したのであった^(註2)。

註1 近代最初の同性愛弁論者たるウルリクス K. H. Ulrichs からしてこの類の自然の錯誤説を採っていたのは皮肉である⁽¹³⁾。

註2 同時代の〈生殖の生物学〉とは対照的な、〈性医学〉の非科学的・イデオロギー的性格については、M・フーコーの『知への意志』⁽¹⁴⁾を参照されたい。

フロイトの精神分析的理論が、ヴェストファル、クラフト＝エビングらの先天的変質説に取って替ったことも、事態を根底から変えることにつながりはしなかった。なるほどフロイトの理論は、人間の本来的な両性的傾向を明らかにすることによって、同性愛と等しく異性愛的発達をも「解明を必要とする問題である」(『性に関する三つの論文』⁽¹⁵⁾)と認識した点で、「同性愛者を特異な一群として他の人びとから区別しようとするような試みとははっきりと異っている」(同上書)といえる。それはプラトンが『饗宴』⁽¹⁶⁾においてアリストパネスの口を借りて語ったところのかのミュートス、男男・女女・男女という三種の原人間から、男子同性愛者、レスビアン、そして異性愛者が同時的かつ対等の存在権利をもって発生したという神話的な説明の、近代における再来とさえ言えるのである。同性愛成立の心的機制を説明するに当ってフロイトの依拠した概念は、ナルシズムとエディプス複合である。幼兒的ナルシズムの時期を経過し男児はリビドーをまず母親へ向けるが、母固着や父恐怖が強過ぎると父親と同一化できず母親に同一化し、同性愛者への道歩むこととなる。「すなわちナルシズムから出発して若いそして自身に似た男性を求め、母親がかつて彼らを愛したごとく、これら男性を愛することを欲するのである」(同上書)。しかしながらフロイトの追従者や通俗化し世間的に流布した精神衛生風の観念にあっては、フロイト自身が〈正常な〉発達と〈異常な〉発達とを精神分析の内部において区別しうる規準を明確にしていなかったにもかかわらず、異性愛へといったる発達はエディプス葛藤の真の解決であるが、同性愛へといったるのは解決の失敗でありエディプス状況への固着、幼兒期ナルシズムへの退行であるかのように語られ、同性愛者は、心理的に未成熟な幼兒的性格者、阻止された成長を何らかの治療法によって促進せねばならない憐れむべき病人とされてしまったのである^(註)。

註 フロイト自身も「リビドーの発達の障害」(『ナルシズム入門』⁽¹⁷⁾ p. 205)といった表現をときおり同性愛について用いているが、その場限りのものに過ぎない。

前記の理論において同性愛者が母親(すなわち女性)に同一化したものと説明されたことが、古典的な同性愛者＝女化した男説を、精神分析(の通俗化した形態)において温存させる決定因をつくる^(註1)。〈自由の哲学〉が受動性を断罪し、性の科学が同性愛者の裡にもっぱら女化という受動性への〈転落〉を見る、その限りにおいて性の科学はフロイトの知見の卓抜さにもかかわらず、排除の論理であることをやめない。のみならずボーヴォアールのごとき典型的自由の哲学者は、当のフロイトの、幼兒の性生活を(男女を問わず)男性性・能動性によって特徴づけるといふ奇妙な主張をば、現実の女性に特徴的なもろもろの受動的欲求を「非真正な」欲求、「教育者達や社会からおしつけられるところの宿命」(『第二の性』⁽¹¹⁾)として一蹴するための論拠として利用しただけでなく、同性愛者をも、「男性という立派なものを自己または他人のうちに受動的に墮落させているこのような男達——」(同上書)と蔑視するに当たっても、暗黙の前提としておおいに活用したのであった^(註2)。

註1 フロイトは上述の理論ですべての種類同性愛が説明されると考えた訳ではなく、たとえばギリシアにおけるごとき〈男らしい〉同性愛の流行には、エディプス葛藤の場合とは全く逆に、男児を男性(男の奴隷)に養育させるといったことが、原因としてあげられるのである⁽¹⁸⁾。フロイトに限らず家庭環境原因説には行きあたりばったりのものが多いが、結局のところ精神分析家らの多様な〈説明〉は、ある社会の標準から逸脱するがごとき家庭からは同じくその社会から逸脱するがごとき人間が育ちやすいという、至極あたりまえのことを述べているに過ぎない、といえるだろう。

註2 ボーヴォアールの〈男性論〉——女性論は男性論を暗黙に前提するゆえあえてこう称するが——およ

びその背景を成すところのサルトルの自由の哲学の抑圧の本質に対する批判は、後続の論文、なかんづく J・ジュネを扱う箇所ではなされるであろう。

だが科学の名によって語られたものは、やがては科学自体の発展によって乗越えられる。性の科学はすでにおのれの内部に、同性愛についての既成観念を一変させるべき、いくつかのあらたな知見を用意しつつあるのだ。すでにかのあまりにも有名にしてスキャンダラスな、しかしその真憑性については疑問をさしはさむことのできない キンゼイらの調査は、アメリカ人男性中三分の一以上が成人後何らかの同性愛行為の経験を持ち、10パーセントが三年以上にわたってもっぱら男色家であり続け、さらに四パーセントが一生涯を近付けぬ完全男色家であるという衝撃的な結果によって、同性愛者＝例外的少数者＝異常者という固定観念を打破するのにあずかって大いに力のあるものであった。四パーセントという数字を日本の全人口にあてはめてみると、成人男性の数を三千万と見積っても百二十万の完全同性愛者が全国に伏在することになり、「同性愛者の数はあまりに多く、彼らすべてを社会的不適応者としたり奇人呼ばわりすることは不可能なのである」と結論づける D・J・ウェスト⁽¹⁹⁾の言葉を、むしろ控え目にさえ感じさせるのである。ふたつ目は、これは一層重要なことと思われるが、同性愛者とは思いの外に男性的な人びとであることが年々明らかにされて来たことに存している。すでにターマンとマイルズ⁽²⁰⁾の性度テストを始めとして、同性愛者特有の性格特徴を検出せんものとの期待のうちになされた様々のテストは、殆どが一義的な結果を見い出せずに終わっているが⁽¹⁹⁾、これは男色家とは女化した人びとであるとする通説に重大な疑義を投げかけるものといえる。が、この点に関して一層意義深く思われることは、近年、同性愛者 homosexuals とすでに触れた異性化願望者 transsexuals との区別が、ますます厳密になされるようになったことである。なるほど異性化願望者も同性を性的パートナーとして選ぶという点では同性愛者と言うことができよう。しかし彼らは異性愛の男性でなければ相手として満足しないし、また同性愛者のように性的な欲求からではなく、他者の前で異性の役割を演じたいという社会的役割への渴望からそうするのである。当然予想されるように彼らもまず同性愛者の社会へと導き入れられることが多いが、異質さの気づかれるに及んで嫌悪と軽蔑の対象となり、やがては放逐されるのが運命のようである^(註1)。〈経過〉もまた両者の間には大幅な差異がある。同性愛者が多く思春期にいたってようやくおのれの宿命を自覚するのに対し、異性化願望の徴候はすでに幼児期に周囲によって気づかれることが多い。また前者が終局的には仲間を見い出し下位文化 sub-culture の中でもともかくも心理的に安定した境地に達することが可能であるのとは対照的に、後者にはこのような意味での解決はありえず、けっして内的に満足せず、いかなる心理療法も効果ももちえず、ただ性転換手術のみが唯一の〈治療〉とされるのである。^(2,3,21,22)^(註2)

註1 ある段階（主として思春期）では異性化願望者は、自他ともに同性愛者として意識されることがあるが、これは偽同性愛者 pseudo-homosexuals と称される⁽²³⁾。

註2 異性化願望の原因については神経学的・内分泌的異常にその基盤を求める説と家庭環境に原因があるという説とがあるが⁽²⁾、ここで、フロイトのエディプス理論をも含めて従来同性愛の発生原因を説明すると称して来た説の多くは、むしろ異性化願望の方にこそ適用さるべきものであったのではなかったか、という点に注意を喚起しなければならない。異性化願望者は同性愛者に比べて数の上でははるかに少数であるにもかかわらず人眼をひきやすく医学的診察の対象にもなりやすい。また同性愛者の中でもキンゼイのいわゆる完全男色者には、むしろ能動型が多数を占めるにかかわらず、受動型の方が目立った存在である。一般の通念もまた従来性の心理学的理論もともども、異性化願望者と受動型同性愛者をもって同性愛者を代表するがごとく見なして来たというのも不思議なことではないのである。

かように異性化願望者と区別される限りにおいて同性愛者の存在が男性一般に提起するところの問題は、前者の場合とは全く異なる部類のものである。前者に対してあてられる〈性同一性障害〉、異性の性への全面的な同一化を結果してしまうという意味での〈性別同一化錯誤〉 gender miss-

identification 等の概念が、後者に対してはさして妥当性を持ちえないことは言うまでもない。古典的一生物学的理論において後者を指すに用いられた〈女化した男〉というイメージが、むしろ前者に対して適合するとするならば、後者に対して用いられるべきイメージは、風俗習慣をこととしたエトランゼのそれであろう。すなわち、同性愛において真に提起されるべき問題は、男性としての異なる諸可能性、異なる存在様態 *Seinsart* についてのそれであり、われわれは異性愛的同一性 *heterosexual identity* に対比させてこれを、同性愛的同一性 *homosexual identity* と称することができるのである。われわれの社会において市民権を得てまかり通っているのはなるほど異性愛的同一性の方であるが、この同一性すなわち〈男性〉が〈つくられた〉ものであり、これまで述べて来たように様々の問題点を伴っていると考えられる限りにおいて、同性愛的同一性もまた同一性可能性のひとつとして対等の比較相手の権利を要求できるはずであり、いずれが男性アイデンティティとしてより安定したものであり、かつ男性としての諸可能性をより豊かに展開させうるものであるかということが、ふかく考察される必要が出てくるのである。

同性愛者の実数と、その存外に男性的な実像の把握というふたつの知見に並ぶ第三の知見は、本来、性の科学の外部からもたらされたものである。人類学的調査の進展が、大半の未開社会においてわれわれの社会のような同性愛タブーが存在しないこと、いくつかの社会ではそれは奨励され制度化さえされていることを明らかにし、従来までの歴史的文化史的知見に加えて比較文化学的考察を可能にすることによって、同性愛タブーの特異性を浮かび上らせてくれたのである。

第 3 節

同性愛そのもののみならずその社会的禁止 *taboo* をも説明を要するものとして視野の内に収めること——これが従来までの性の科学に、徹底的に欠如していたところのパスpekチヴであった。そもそも同性愛発生の〈病因〉や〈機制〉を解明しようという企て自体、同性愛を異常視する科学以前の前提ぬきには考えられないものであり、歪められた立論からは歪められた結論しか期待できないのは当然であった。異常か正常かという問いは、われわれの社会内において所与として与えられた同性愛現象のみの考察からは正当に答えられることは困難であり、それと同時に——むしろそれに先行して——同性愛タブーの構造と意味とそして発生とが、考究の対象とならなければならない。ここに、一連の論稿の序論を成すべき本論文が、『近代・男性・同性愛タブー』と名づけられなければならない理由が存するのである。それゆえ、われわれはまず同性愛タブーの地理的および歴史的なひろがりや程度とを鳥瞰したうえ、近代文明に固有と考えられるタブーの一形式についての一個の仮説の素描を試みることにしよう。さらにこの作業を通じて、同性愛にまつわる問題をその真の場処に置き、ただに同性愛者にとってだけではなく男性一般にとっても、追求されなければならない意義をもつ問題であることを、明らかにすべく努めることにしよう。

現存する未開社会についての利用しうる資料の総合的調査は、フォードとビーチ⁽²⁴⁾ によって1952年までになされた。その結果76の未開社会のうち実に64%の47の社会で、何らかの形の同性愛行為が正常でかつ完全に容認できるものとされていることが明らかにされたのである。その中には、すべての男性と少年とが *coitus par anum* を実行し、この関係に入らない男を変人として仲間はずれにする北アフリカのシワ *Siwan* 族がある。思春期の少年が年上の青年に男色 *sodomie* を教えこまれ、一年を過ぎると今度は結婚するまで年下の初心者に手ほどきする立場となるのが慣習であり、教育であるとも考えるニューギニアのケラキ *Kerski* 族やキワイ *Kiwai* 族がある。すべての少年が年長の青年と何年間かを〈妻〉としての結婚生活を送る風習をもつ、オーストラリアの

アランダ Aranda 族のような社会さえある。フォードとビーチはこれらの資料の検討から、「われわれの社会（＝近代西欧社会）はすべての人間に同性愛行為を、それが如何なる形のものであれ認めていない。この点でそれは大多数の人間社会と異なっている」という結論を引き出している。

歴史的鳥瞰もまた、同性愛禁止を有する文明は少数例に過ぎず、むしろ異例とさえ言うべきであることを示唆してくれる。古代ギリシアにあって同性愛は、正常であるだけでなく教育的かつ高貴でもある情熱として奨励され制度化されていたし、ヘレニズム＝ローマ世界でもそれは流行した^(註1)。われわれの知る限りオリエント＝地中海世界にあってはただヘブライ民族のみが——おそらくはソロモン王国崩壊後の危機にあって——強力な禁止を形成したが、それは、同性愛を慣習化し宗教的な儀式化さえしていた古代メソポタミアの諸民族に抗し、民族的アイデンティティを死守する必要性からであった^(註2)。ヨーロッパ社会がヘブライ＝キリスト教的禁止の下に置かれていた中世にも、ある意味でギリシア文明の後継者であったアラブ文明圏はその少年愛 *παιδεραστία* をも継承し、今世紀に入っていくつかの国に法律の規定が設けられるという事態にもかかわらずこの風習は続いている。われわれの〈極東文明圏〉にあっては近代にいたるまで禁止の存在した形跡はなく、なかんづく日本においては、僧院における稚児愛を中心とし院政期以降貴族の間にさらには武家社会へとめざましい流行を見せた男色は、室町末期から江戸初期にかけて衆道の名のもとに、ギリシア的少年愛の正確な対応物を結晶せしめているのである^(註3)。

註1 古代世界における同性愛の盛行については、およそ当時書かれたどの文芸作品からも窺えるものなので、ことさらに参照文献をあげる必要を認めない。より詳しく知りたいという読者のためには、プラトンの『饗宴』⁽¹⁶⁾を始めとする対話篇、プルタルコスの『列伝』⁽²⁶⁾、ペトロニウスの『サテリコン』⁽²⁷⁾等が手頃だろう。

註2 わが国の代表的な研究としては文学史畑ではあるが岩田準一の『本朝男色考』⁽²⁸⁾（『犯罪科学』1930～1931掲載）が白眉であり、また同じ著者の『男色文献書誌』⁽²⁹⁾も、研究者の座右の書として便宜が多い。戦後の文献としては、西山松之助『衆道風俗について』⁽³⁰⁾がまずあげられるが、「要するにこれが東古今のゆがめられたセックス風俗であることは、間違いない」などとしているのは世におもねる軽率な発言であり、研究者としての姿勢が問われなければならないだろう。

しかしながら歴史的概観がわれわれに、同性愛タブーの展開がヘブライ＝キリスト教文明の展開と、その外延を殆ど等しくすることを示してくれるにもかかわらず、今日みるような近代化された社会に普遍的なタブーが——同性愛擁護者が往々にして強調するように——ヘブライ＝キリスト教的タブーの継承もしくは残存物に過ぎない、と見るのはいささか事態を軽視した見方といわねばならない。日本のようについ1世紀前まではいかなるタブーも存在しなかった社会において、キリスト教の勢力浸透が遅々たるものであり、宣教師・教会の社会的影響力が無に等しいにもかかわらず、タブー（の意識）だけが急速に——しかも明瞭な法的強制力の後押しもなくして——形成されていったのはどうしてであろうか。イタリアルネサンスの15・16世紀が、苛烈な宗教的タブーの下で男色を殆ど公然の事実と化しえた^(註5)にもかかわらず、キリスト教の漸次的な衰退期を迎える17・18世紀、同性愛がかえって地下に潜んでしまうように見えるのは、清教徒主義 *puritanism* の影響とばかり言い切れるかどうか。弱化したキリスト教倫理に代って19世紀に出現した性の科学の戦略は——前述したように同性愛者を〈女化した男〉として石化する——伝統的キリスト教的タブーの単なる機能的代替物をもくろんでいたのではなく、より内面化されたタブー、より徹底した排除の論理を体現したものであったのではなかったか^(註)。——これらの疑問がわれわれに、洋の東西を問わずタブーの形成もしくは再形成が、キリスト教とは独立に生じること、また、その際平行して生じているのがいわゆる〈近代化〉・産業社会化であることに目を向けさせ、近代産業社会に固有の同性愛タブーというものがあろうのかもしれない、ということを示唆してくれるのである。

註 このことはフーコー⁽¹⁴⁾の倒錯概念形成の史的分析からも示唆されることである。中世には倒錯者は戒

律にそむくという意味で〈異教徒〉に過ぎなかったのに対し、近代性医学はそれを〈生物学的変種〉とみなすという、あらたな、一層徹底した排除の論理をあみ出したのである。

それゆえ、歴史的キリスト教的な由来の追究とは別に、同性愛現象に直面して現実に世人が示す軽蔑や非難、われわれ自身が覚える嫌悪や羞恥を直接に考察の対象とすることなしには、タブーの本質は明らかにはならない。私にはなによりも、近代的タブーの最も顕著な特徴のひとつはその極度に感情的＝非合理的な性格であり、同性愛を非難する人びと自身が——伝統的キリスト教的倫理の支配下にある人びととは異なり——非難の根拠を真に合理的に示すことができないでいる、という点に存すると思われるので、まずこの点を手掛りとして考察を進めてゆくことにしよう。

じっさい、キリスト教的背景をもたず、かつ、〈時代遅れの〉性抑止道德からある程度自由であるはずの人びとが、同性愛者に対して投げつける〈変態〉という言葉ほど、偏見の心理学にとって興味深くも分析しがたいある複合概念はないであろう。なるほど彼らも俗流心理学をもって自分らの嫌悪と軽蔑とを根拠づけることができるかもしれない。同性愛者を男性の肉体と女性の心性とをもって生まれた不運な人びととする先天説にせよ、幼児期のコンプレクスに固着し退行するにいたった治療を要する未熟性格者とする俗流精神分析学説にせよ、彼らはこれらの説を聴いて納得したつもりになり、おのれの嫌悪と蔑視とを合理化することができる。しかしながらよくよく考えてみるとこれらの学説は、先天説であれ後天説であれ、同性愛者を自らの性癖に責任を取ることのできない〈病者〉として呈示しているのであって、とりもなおさず身体障害者や精神病者のように社会によって保護されるべき人びとであり、いたずらに侮蔑や嘲笑に晒されてはならないということを含意しているはずなのである。〈障害者〉のための福祉や差別語の問題に多大な関心が示されている今日の日本のような社会において、それらの問題と関連するものとして同性愛が論じられたためしがないということは、これらの学説が実は同性愛蔑視者を真に納得させてはいないこと、それゆえ同性愛に対する蔑視は、身体障害者や精神病者に対するそれとは異なる隠された源から発し、異なる心理的機制に基づいていることを推測させるものである。同性愛者がしばしば政治的〈悪〉の役回りを押つけられるという事実が、この心的機制にいくばくかの解明の光を投じるだろう。アメリカにおいてはマッカーシーの赤狩り時代には共産主義支持と並んで同性愛傾向が非米活動として攻撃されたし⁽¹⁹⁾、ソ連・中国・キューバなどの社会主義国では逆に、〈ブルジョア的退廃〉として法的制裁を受ける⁽²⁵⁾。わが国においても戦後は、民主主義倫理に反する人間関係として農奴制や軍国主義と結びつける偽似論理が散見される⁽²⁶⁾。かように好ましくない政治的社会的価値を押しつける対象とされるということは、同性愛者が欧米社会におけるユダヤ人同様、身代り集団・贖罪の羊となりうること、同性愛者に対する偏見と蔑視の心的機制は、想像以上にユダヤ人に対する偏見と蔑視のそれに通じるものがあることを推察させるのである。言うならば、世人が同性愛者において見出す嫌悪すべきものとは、彼らがおのれの内において目をそむけるところのものであり、彼らの軽蔑と嘲笑の裏には、無意識の嫉妬と羨望が潜んでいるかもしれぬということが想像されるのである。

註 1例をあげておこう。「日本が風習を学んだ中国はもちろん、専制によって農奴を支配したインド、トルコ、いずれも少年愛が盛行した。近くは帝政ドイツ、ナチスドイツにその例がみられるのである。」(山崎正夫『三島由紀夫における男色と天皇制』⁽³¹⁾)

同性愛を含む〈倒錯〉の種々の形態において、〈倒錯者〉の性別によって公衆の反応が全く異なってくるという事実が、蔑視の構造をより明確にしてくれるであろう。女子の同性愛 Lesbianism は男子のそれに比べてさしてひどい嫌悪や嘲笑の対象とはならないし、異性化願望とマゾヒズムに關しても事情は同様である。服装倒錯、露出症にいたっては、今日では女性においては——ただ女性においてのみ——社会的タブーの消滅によって、〈患者〉の存在も事実上消滅したと言ってよいので

ある。社会学者デボラ・ファインブルーム⁽³²⁾は、今日の社会における〈二重基準〉の支配を如実に示す、興味ぶかい実験をこころみている。すなわち、公共の場における①全裸の男性、②全裸の女性、③女性の下着のみをつけた男性、④男性の下着のみの女性、⑤完全女装の男性、⑥完全男装の女性、という6つの想像的場面の異常度を彼女の10人の友人に評定させたところ、③、①、⑤、⑥、②、④の順にランクづけがなされ、上位3場面を男性にかかわる場面が独占するという結果がえられたという^(註)。これに対し観見症とサディズムは、男性がおそらくは比較的寛容な扱いを期待できる領域かもしれない。——男性における服装倒錯・露出症・異性化願望・マゾヒズム・そして同性愛……と最も蔑視されることの多い〈倒錯〉の種類を並べてみると、そこにおのずと一定の特徴が浮かび上るのに気づかない訳にはいくまい。これらの性愛表現形態が特に公衆の嫌悪と嘲笑をよび起す理由は、近代社会にあって通常女性に属すると見られている属性や役割を、男性の側に取り込み、男性の身でもって実現しよう——もしくは実現させよう——とすることが本質的部分をなしているところにある。すなわちこれら一群の〈倒錯的〉行為や欲望にあっては、男性の肉体が——自分のものであれ相手のものであれ——美的な魅惑の対象として、もしくは受動的な肉として、もしくははもっぱら見られるもの〈視線客体〉としての存在の様態を取って現象することが、必須となっているのである。

註 女性において服装倒錯の概念が無意味になるほどに女性の服装の自由化が進んだ原因については、ファインブルームによれば⁽³²⁾、それだけ女性解放が進んだ結果である、という見方と、男性に比べ女性が社会的に重要視されていない証拠である、という説との相対するふたつの見方があるそうであるが、後者の見方は、現在に比べ明らかに女性の地位の低かった封建社会において、洋の東西を問わずかえって服飾の自由、〈おしゃれの自由〉の男女平等がみられる、という歴史的事実によって容易に反駁できる(第4節参照)。江戸時代の若い男性は紫の振袖を男性として着用する自由をもっていたのであるが、だからといって男性が重要視されていなかったという訳ではあるまい。男性にだけ異装タブーが今日残存していることは、やはり、男性のエロスの解放がそれだけ遅れを取っていることの、直截な現われと見るべきであろう。

われわれはようやく論議の核心に達することができた。同性愛タブーがその派生態、もしくは表現形式のひとつに過ぎないような、はるかに根源的なタブーが近代社会の深層に横たわっているのである。それは単に同性愛〈患者〉を、服装倒錯、露出症、女性化願望等の〈患者〉を、日々に生産再生産するばかりではない。性的ならざる領域においても、貴族男性の華麗な衣装を廃し、ギリシア人男性のごとく肌をあらわにすることを慎ませ、男性は美術の題材となるに値しない、〈絵にならない〉存在であると思込ませるほどにわれわれの美意識を根底から条件づけているところのいわゆる言いがたい圧迫力、男性の存在様態に強力な制限を加えているところの見えざる権力である。

この一層根源的なタブーをここで私が、男性に対し美と受動性と客体を認めることのタブー、といささか冗長にかく不器用に表現するならば、ある人びとはそれを、男性における女性性のタブー、と簡単に言い直したい誘惑にとらえられるだろう。しかしながらこれらの三つの属性が——次節において徹底的に明らかにされるごとく——何ら女性の本来的独占物ではなく、私としてはむしろ〈男・女〉のカテゴリーよりも一層根本的なカテゴリーとして用いたい意向である以上、その表現は適当ではない。また、ここであらかじめ言うておいてもよいと思うが、このタブーは——すでに読者の一部がおそらくは想像し始めているであろうようには——男性優位社会の産物であるのではない。のちに見るように、このタブーの出現と男女の相対的力関係の歴史の変遷との間には、およそ相関関係は認めがたい。このタブーの形成にあずかって力のあった世界史の変動とはむしろ〈近代〉の出現そのものなのであり、封建制の網の目を破って市民社会が、西欧大陸のそこそこに筈のごとく頭を擡げ出したことから一切がはじまっているのである。

同性愛タブーはおそらく、もろもろの〈表層タブー〉のうちでは、この根源的タブーに最も密接に結びつけられているものではないであろう。われわれの文明の裡では、同性愛者の運命は女装者や露出症者のそれよりもはるかに耐えやすいものであり、復権への途も容易であることだろう。——それはともあれ、同性愛タブーや女装タブーが、この根源的タブー、男性の肉体に美や受動的や客体性を認めることのタブーの単なる受動的反映に過ぎないとし見るとするならば、それはいささか事態を単純化した見方であるかもしれない。おもうに近代人男性の深層には、美しくありたいという、受動的存在でありたいという、客体（見られるもの）でありたいという根源的欲求が潜んでいるのであろう。内面化されたタブーによって——女性に対する——嫉妬と羨望と化したそれらの欲求が、投影対象として同性愛者や女装者を見出し、嫌悪やら軽蔑やら恐慌やら羞恥やらをひき起しているのであろう。——この解釈が、おそらくはこの解釈のみが、しばしば指摘されるところの⁽²⁵⁾ 同性愛に対する公衆の感情の一非合理的反応を、なかならず男性の側の感情的—非合理的反応を十全に説明するものであるだろう。

われわれの社会とわれわれ自身の深層を支配しているこの強大にして無形のタブー、なかならず男性において性愛の多様な表現可能性に制限を加え、男性の存在仕方そのものを一定の枠組に押し込めようとするこの不可視の権力が、近代文明と近代的人間観にふかく根柢を置くものであること、それどころか近代人男性とはこのタブーであることを十分な説得力をもって示すためには、近代社会そのものの形成過程に即した、詳細にして徹底的な〈近代人〉の分析が必要となるだろう。われわれはそれを、のちの機会に課題として残すことにしよう。このタブーが近代社会に固有なものであり、近代以前のもろもろの文明のあずかり知らぬものであることを明らかにするためには、このタブーの一面であり表現型でもある、男性に美を認めることのタブーの形成のみを考察すれば充分であろう。それゆえ次の節においてこの点を、主として美術史に手掛りを求めつつ略述することにしよう。

第 4 節

今日のわれわれにとって人類雌性の美における優越は、何ら疑うべき余地のないものにみえる。女性は単に美しくある必要があるだけではない、事実美しいからこそその天与の資質をますます引立てるべく装いを凝らしあるいは肌をあらわにし、一方、男性は美しくある必要がないだけでなく際立たせるべき何らの美をもたないがゆえに、一律の背広というむさくるしいとしか言いようのない服装に甘んじているかに思われる。大多数の鳥類や高等哺乳類において正反対の現象が見られることがあまねく知られているにもかかわらず、人びとはこの事態を人間の〈自然〉に属することとして怪しまず、かつ、美しくありたいという欲求がなにも女性のみにも潜む神秘的な本能でもあるかのように言説する。しかしながら、人類はじまって以来美における女性の優位が固定したものであったように考えることが全くの俗見であり、それどころか現在みるような女性覇権がたかだかこの4・5世紀の間にうちたてられたに過ぎないことは、美術や服飾の歴史に通じた者には容易に看破できることである。

たとえばルーヴル美術館のような、古代から現代にいたるまでの美術の流れを鳥瞰しうる大規模美術館を訪れてみるがよい。そこで逢着するのは、ギリシア—アルカイック期からミケランジェロにいたるまで、絵画と彫刻とを問わず女性裸像を質量ともに圧倒して見る者に迫ってくる男性裸体像群である。ヌードといえば女性の裸のことだと思い込んでいる現代人は当惑して、あるいは自らの視覚に内的な検閲の罅を入れ、あるいは美術史上の特異現象と解釈し、裸体表現の男女比がその時代の美意識を反映しているやもしれぬという可能性にはついぞ想到しない。芸術上の裸体表現・

肉体描写が年々大胆になってゆくことをもって人間の進歩と解放と考える類の人士であれば、こと男性に関する限りかえって現代に退歩と抑圧の強化が現われていることに目をとめて愕然としてしるべきであるが、彼らは多く、男性の肉体もまた肉体であり解放に値する肉体であることに思いたらないほどにも男性の肉体を蔑視してしまっているので、そのようなことはけっして起らない。ただ、十分な注意力を備え、かつ、男性は労働能力と知性（という名のこれまた労働能力の一形態）において優秀でありさえすればよしとする産業社会の倫理にけっして屈従しようとしないうのみが、かつて男性は美しかった、少くとも美における女一男の優劣は相対的なものに過ぎなかった、という事実気づき、率直に感激し、あるいは鳥やけものと同じく人間もまた雄性の方が美しいのがより自然なのかもしれない、と自問しながら、美しくなくなってしまった男性達がむさくらしい背広に身をやつして右往左往している外部世界へと戻ってゆく。

事実、〈文明〉よりはるかに〈自然〉に近い未開社会においては、男性はなお雄獅子の威厳雄孔雀の豪華のなごりをとどめているかにみえる。男性も女性に劣らずけばけばしい羽根飾りを身につけているし、なかならず最も美々しく装っているのは、たいていの場合女性ではなく、最も身分の高い男性たちなのだ。しかし文明化の進展と共に、エソロジストが男性の灰色化 *Vermausgrauung des Mannes* といみじくも名づけた現象が進行を始める。「われわれはすべての文明において、男の《灰色化》の過程を経験する。男の衣裳は簡素になり、男の飾りは退化し、武器はまったく捨てられる。自分を誇示する気どりでさえ、社会的軽蔑を受けるようになる。…(略)…ただ、集団を代表する順位の高い人々だけが華かな装いをすることが許されるが、これすらもだんだんすたれてきつつある。」⁽³³⁾ とはいえ、今日みるような暗色の背広に短髪という一律化、絶対的灰色化は、近代文明の登場をまって初めてもたらされたということが指摘されなければならない。なかならず近代文明がその出発にあたって範と仰いだ古代ギリシア文明こそは、皮肉なことに、男性の美を男性の裸体をこよなく追求し称揚した点で、近代文明とは最も画然と区別されえる文明であった。

「ギリシア人にとって、男性美が女性のそれよりも、はかり知れぬほどまさっていたことは、おそらく事実であろう」（ヘンリックス『性の社会学』）⁽³⁴⁾。このことは例えば、さまざまな用途の壺に描かれている絵が、圧倒的に男性であり、それも男性裸体像であるという事実からも窺えるのである。また、今日の慣例とは逆にギリシア人は、男女を並べて描く際には男性のみを裸体とし、女性は着衣で表わすのがふつうであった。そもそもギリシア美術とはその本質において男性裸体像の芸術だったのであり、男性裸像の様式変遷がとりもなおさず様式全般の変遷であった。後代、裸体像の典型とされるに至ったアフロディティ像にしても本来着衣をもって表わされ、対照的にアポロン像の方は、全裸であることが主たる属性となっていたのである⁽³⁵⁾。今日の社会が女性裸体の映像に溢れているように、ギリシア社会とは男性裸像で一杯になった社会であったのだ。

註 ケネス・クラーク『ザ・ヌード』⁽³⁵⁾ を見よ。裸体美術の意味に関して、この名著からは多くの示唆を受けた。

造型表現における男性裸体像の優位はまた、日常生活と軌を一にしたものでもあった。これまた今日の慣行とは反対に、ギリシアの女性が頭から足まで重々しく衣をまとるのが常であったのに対し、若い男性は短い衣しかつけなかったし、また体育競技はすべて全裸で行なうのが慣しであった⁽³⁵⁾。ギリシアの青少年がいかに完全無欠な美の具現者たることを追求したかは、十代の頃絶世の美貌を謳われていたアテナイのアルキピアデスが、唇の形が悪くなるという理由で笛の稽古を厭い、他の少年達もそれにならったという、有名な逸話でも窺い知ることができるのである^(26,36)。

ローマ、中世と時代が進むにつれ、男性美の優位は大きくゆらいだかにみえる。とはいえローマ期はなおおびただしい男性裸像の傑作を産み出し、中世貴族のタイツ姿は男性短衣の伝統を継承し、これは、〈長ズボン族〉 *sans-culottes* の革命にともない男性の身体の線が、爪先まで最終的

におおわれる日まで続く。宮庭貴族にとって化粧は日常のことであり、髪を肩まで垂らし、「きゅうっとひきしめた腰まわり、風船のようにふくらんで、肩口のあたりでもりあがった袖、足にまでもとどく長い上着、すなわち《ウップランド》、かとおもえば、ほとんど尻まるだしの短すぎる胴着、円錐状ないし円筒状の縁なし帽、さもなければ、頭巾が、実に奇妙なくあいに、鳥のとさか、ないし、燃えさかる炎のかたちに、頭にまきついている」(ホイジンガ『中世の秋』)⁽³⁷⁾ という有様であり、「女の衣装はまだしもなので、男の服装の方が、もっとにぎやか」(同上書)という時代であったのだ。転じて眼をアラブ世界へ向けると、回教徒達は造型芸術こそ持たぬとはいえその文学は、女性美と平等に男性美を称える表現に満ち、千一夜物語の紹介者として有名なバートン卿が、イギリス読者の困惑を予想して以下のような註を付けなければならなかったほどのおおらかさに達しているのである。「この素朴な両性の美の讚美はわれわれの騎士道時代の特徴でもあった。今日では、かような讚美は、いわゆる女性 fair sex の《専門的な美》に殆んど限られてしまっている。」⁽³⁸⁾

イタリア・ルネサンスは古代の理想を甦らせたが、それは造型芸術においては何よりも、男性裸体像の復活を意味したのだった⁽³⁵⁾。ドナテルロもレオナルドももっぱら男性の肉体に美を追求し、ミケランジェロがギリシア以後の最大規模で、男性的芸術の大輪の華を咲かせてみせる。ルネサンス期はまた、男色の実行者に死罪をもって報いる峻厳な宗教的タブーの支配にもかかわらず、さきにも触れたように同性愛が半ば公然と流行した時代であった。レオナルドやミケランジェロがギリシア的少年愛の実行者であったことはあまりにも有名な話であり、シェイクスピアも美青年へ寄せた愛のソネット集を残している⁽³⁹⁾。

しかしながら盛期ルネサンスはすでに、未聞の思想をひきさげた新興の社会的勢力が少しずつその巨大な影をひろげてゆく舞台でもあった。

いうまでもなくこの勢力とは近代ブルジョア階級のことであり、彼らの発明にかかる未聞の思想とは、男性は美しくある必要がない、というのであった。

すでに、ヴェネチアのジオルジオーネ Giorgione (1476/78頃—1520) はギリシア以来の伝統を破り、男性着衣女性裸体という新構図を編み出し(『田園の合奏』パリ、ルーヴル美術館)、アポロンにとって代って裸像芸術のメインテーマとなったヴィーナス像の展開とともに、ティチアーノ、リューベンスをへて18世紀のアングルにいたって女性裸像の覇権が確立する⁽³⁵⁾。19世紀には男性裸像はほぼ完全に絵画の世界から放逐されるにいたり、今日のわれわれは、着衣裸体を問わず男性美の表現が美術の上になされるのを目撃する機会をもはや殆ど持たない。この推移が、資本主義とプロテスタンティズムの興隆からブルジョア革命の時代をへて産業革命において完成を見る近代文明と近代市民社会形成の過程と、正確に照応し合うことは一目瞭然であろう。

服飾の上でも貴族の没落ブルジョアジーの覇権は劇的な変化をもたらしている。男性の化粧は禁忌となり脚線美は否定されてしまう。(実物もしくは複製の)長髪にかわって、ギリシア人のいわゆる〈奴隷の髪〉が標準型となり、紳士であることの身分証明となる⁽⁴⁰⁾。〈偉大な世紀〉を通じて男性灰色化の進展はおよそとどまるどころを知らない。アンドレ・ジッドによって記録されたごとき同時代者の証言は、その表現が見事で完璧であるだけなおさらに、読む者にいささか悲惨の趣きさえも伝えてくれるのである。「少くとも我々文明国におきましては、歴史も古い女性の服飾趣味が向上維持されておりますに反し、この事ときわめて明瞭な対照をなして、男性はあらゆる扮飾から益々遠去かって行くのであります。地味な平民服でさえ煩わしいと考えられて、軽くされ短くされ、ただ背広にされてしまいます。それ故、婦人の加わる儀式に於きましては、我々男性は、恰も、花の間を縫う卑しき蛆の如き感があります。」(ジッド『コリドン』)⁽⁴⁰⁾

註 ギリシアでは奴隷は髪を短く刈るのが風習であり、したがって自由な身分となっても痕がしばらく歴然

としていたのである。また、中世においても短髪は、農奴や囚人の髪型とされていたものであった。

眼を東に転じると、わが国においても全く類似の過程の生じているのが認められる。平安末期以後男子の化粧は公家・上級武士の風習として一般化し、平家の公達は薄化粧におはぐろで合戦に臨み、¹¹⁰その独特の美をもって坂東の荒武者の心をも惑乱する¹¹¹。宮廷文学にも軍記物にも両性の美に対するおおらかな讚美があふれ、しかもその修辞法はいまだ「女にも見まほしき」という類の女性美本位的表現を知らない。平安朝からの水干に袴という少年美装の伝統は、武家社会にあっても振袖御小姓の名品を生み出し、安土桃山から江戸初期にかけての城下町には、水もしたたる若衆姿が娘姿と妍を競う。しかしながら江戸中期以降、町人文化の台頭と共に異常なまでとなった女性美装の風潮はようやく服飾の男女差を著しくし、明治新政府の断髪廢刀命が男性の灰色化を決定的なものにする。

註 『平家物語』巻九、『敦盛最後の事』参照。この場面は、当時の美少年崇拜の風潮に対する理解がないと十二分に鑑賞されえない。

かくしてわれわれは洋の東西を問わず、近代化するものが、男性固有の美の否定、女性による美の独占の過程として、女性への美の専門化現象として進行する有様を見るのである。男性は美しくある必要がない、というブルジョア固有の思想は、ブルジョア固有の権力奪取と共に、男性は美しくあってはならない、と命ずる見えざる権力と化し、タブーをいよいよ内面化させた男性たちは——評価されない資質は伸びないという単純明解な理由によって——事実美しくない存在となつてゆく。もう幼時から彼らは、美に対して、存在の關係ではなく所有の關係に、それゆえに一般に価値というものに対してブルジョア固有のとり結ぶ關係に正確に照応する關係に入ること強制される。女一男の美の優劣の絶対的固定化を天与のことと思ひ、〈美しき性〉に生まれなかったという不運を、「男は顔じゃない、中味だよ」式の精神主義によっておおいにかくし、もっと手の込んだものになると、女性の美なるものが、被差別と性的商品化の結果でしかないような偽似論理を用いて自己満足する。そうして今日の女性の著しい服装の自由を——特権という考えが一般に否定される社会風潮にもかかわらず——美しい性の特権と解して疑わず¹¹²、自らは一様の背広という労働服、産業社会という全地球の規模の強制収容所における囚人服を着せられていることにも気づかず、肉体の解放とは女性の肉体の解放のことだと思ひ込むほどにも自分自身の肉体を蔑視し、労働機械たるに甘んじ、他の諸々の可能性にはついぞ考えが及ばない。

註 ボーヴォアールは、「女の着物を着るほど自然でないことはないのだ。もちろん男の着物も人工的であるだろうが、この方はずっと簡便である」(『第二の性』¹¹³)と書いているが、30年後の今日、男女のこの状況は完全に逆転した。今日の女性が、夏は短スカート、冬はパンタロンの変化と合理性を享受できるのに対し、盛夏にも背広が制服化した男性の服装は、家永三郎氏のごとき、相も変わらず服装史を女性の服装史中心にしか見ようとしない進歩陣営の歴史学者でさえも、「男性の服装の異常さ¹¹⁴」として数頁を割かねばならなかったほどに、不自然であり、抑圧的である。

第 5 節

まことに近代文明とは、美しくありたい、他者の眼を魅惑するものとしてありたいという人間本然のふかい要求が、ただ男性にあってのみ蔑視され禁止されるという点において先行の他の文明から戟然と区別される、極めて特異な文明であるといえよう。この特異な蔑視、禁圧のゆえんを、〈存在〉よりも〈所有〉に、〈名誉〉よりも〈富〉におのれの根拠を置く近代ブルジョア固有の存在様態に求めることは可能であろうし、また、自由・自立・能動・主体性等の一群の価値を殆ど強迫的に称揚し追求する、彼らの〈自由の哲学〉に責を負わせることもできよう。さらに、資本主義

的生産関係が、男性に、労働という、美的要素の全き排除にあって初めて成立する体の活動におのれの本質を認めるよう、強い結果と見ることもできるかもしれない^(註1)。あるいは比較行動学的見地から、雄性的誇示行動においては攻撃的要素と性的要素とが分かちがたく結びついているのであり、社会の巨大化と個々の成員の匿名化に伴い攻撃的誇示に対する抑制が強まるにつれ、性的誇示——すなわち〈美〉——も同時に禁圧されていったのだ、と説明できる面もあるだろう^(33,42)。いずれにしても、女性美の優位なるものが男性優位社会の産物に過ぎないなどという、往々にして主張される説は、古代ギリシアが近代以上の男性優位社会であったのを始めとして、男性美の消長と男女の社会的地位の相対的な変遷との間に何ら一貫した平行関係が認められないことからして、度外視されるであろう。しかしながら、私がここで特に問題としたいのは、男性における美の禁圧の由来や原因ではなく、この禁圧が男性の存在様態に対し、男性のアイデンティティに対し及ぼすこととなった根底的な影響であり変質である。私はさきに、第2節において、異性愛的（男性）同一性と同性愛的（男性）同一性とを、男性の異なる諸可能性を示すものとして、対概念として提起しておいた。もし、これまで論じられて来たところによって徐々に浮彫りにされて来たところの、近代文明のただなかにおけるかくも特徴的な男性の存在様態を、近代的一異性愛的—男性同一性（もしくは近代型男性アイデンティティ）と呼ぶことが許されるならば、その対極として、かつてなく男性美が称揚された文明であったギリシアにおけるそれを、ギリシア的一同性愛的—男性同一性（ギリシア型男性アイデンティティ）と名づけることができるだろう。

註 女性は資本主義的生産関係の直接的な場にはいないから、この変化を免がれえる。

近代型（男性）アイデンティティとギリシア型²（男性）アイデンティティとの根底的な差異は、前者において、われわれがふつう女性的とみなす諸特性が厳しく退けられるのに対し、後者においてそれらが男性性と何ら矛盾することなく統合されている、という点にある。ギリシア人は、〈美〉はもとよりのこと、受動性や客体性（見られること）等の属性を、男らしさと両立しえないものとは考えなかった。ギリシア的愛 greek love の世界にあっては、第3節で取り上げたいくつかの未開社会と同様、うら若い男性はまず年長の青年の〈稚児〉として受動的性愛関係に入り、この期間を卒業すると今度は自分が〈念者〉として年下の少年に能動性をもって臨むようになるのが慣わしであった^(註1)。しかもこの関係（少年愛 παιδεραστία）はすぐれて教育的なもの、「立派な生き方をしようとする人々にとってその一生の指導原理となるべきものを、われわれにしっかりと根えつけることができるという点では、門閥も名誉も富も、恋に較べればものかずではない」（プラトン『饗宴』）⁽¹⁶⁾と称えられるべきものであり、かつこれらもっぱら男性を愛する男性は「天性最も男らしい者であるから、青少年の中でも最優秀の者どもである。…(略)… とういう少年たちが成人すると、ただかれらだけが一人前の男子としてどうどう政治に登場するのである。」（同上書）とされていたのである。ギリシア人男性はまた、近代人におけるような、見られることへの恐怖、サルトル⁽⁴³⁾がいみじくも他有化 *aliénation*、奴隷状態、私の諸可能性の死、等の言葉で表現したごとき、不安と恐慌に無縁であった。競技場に全裸で立つ競技者は、なるほど万余の観衆の前に隈もなく見られるものとして存在しているのであるが、まさにこのことから彼の、〈見るもの〉に対する優位と支配力が、〈奴隷〉に対する〈主人〉の関係が結果する、と考えない訳にはゆくまい。視覚とは本質的に受動的な機能であり、〈見る〉ことは〈見せられる〉ことに通じ、〈見られるもの＝視線客体〉がかえって〈見せるもの＝行為主体〉となるという逆転が生じるからである^(註2)。それゆえにいにしえの王侯貴族はけっして民衆を見ず、民衆におのれの華美と栄耀とを見せることによって支配したのであり、匿名の組織の背後に身を隠す〈見えざる支配者〉などというものは、ブルジョアジーの世紀の産物に過ぎないのである。動物においても雄性的の飾り（獅子のたてがみ、

孔雀の尾等) はなるほど見られるためにあるのであるが、だからといって求愛行動における雄の能動的役割を否定できるだろうか。男は見る側になり女が見られる側に回るといふ、近代に顕著なこの現象をもって、男性能動女性受動のあらわれであるかのごとく言説する近代人の意識こそ、人間的な自然から遠く隔ったふかい変質を、ある意味で〈倒錯〉を、反映しているのではないだろうか。

註1 この風習は、第1節で示唆されたごとく幼児性欲が本質的に受動的なものであるとするならば、存外合理的なものと言えるかもしれない。おのれの受動性を充分に享受してはじめて、次の能動的段階へと無理なく移行がおこなわれる、と考えられるからである。

註2 公開処刑のようなケースでは、この論理は成り立たない、と反論されるかもしれない。しかしながらこの場合、罪人は見られるためではなく、彼の罪を憤り、彼の不運を嘲笑する群衆を見せつけるために、もしくは、彼に加えられる酷烈な制裁によって権力の強さを群衆に見せつけるために、刑場にひき出される、と解することができるであろう。

ギリシア型男性アイデンティティから近代型男性アイデンティティへの移行は、古代末期から中世、ルネサンス初頭を通じて徐々に起こされる。ヘブライ＝キリスト教的同性愛タブーの導入は、男性の受動的諸可能性に一定の制限をもたらしたはしたが、この期のタブーはおそらくは真に内面化された水準には達していなかったであろう^(註)。しかし近代市民階級の勃興と産業社会化の進展が、劇甚にしておよそとどまることを知らない変化をもたらす。男性は受動性の領域のみならず〈美〉の世界から、そして〈見られる〉世界から全面的に撤退を開始する。男性の肉体は画題として取り上げられることがまれとなり、とりわけ裸体像は描かれなくなる。半ズボン族(貴族)から長ズボン族(第三身分)への政権交代が男性裸体タブーの仕上げをなす。舞台において女装の少年俳優が女役を努めるという、ギリシア劇以来の伝統でさえも17世紀には廃れて、表面上の理由はどうであれ、これは女装タブーを完璧なものとするのに一役買う。男性は文字通り見られない存在、〈絵にならない〉存在と化してしまい、ドブネズミ色の背広が〈まっとうな人間〉であることの標識となる。縮小した男性アイデンティティはもはや女性アイデンティティと相交わる領域を持たず、越境者に対しては倒錯の汚名が容赦なく着せられ彼の社会的生命を断つ。

註 キリスト教的タブーの支配は、東ローマ皇帝ユスティニアス(A. D. 482-565)の布告によっても窺えるように^(註)、〈上から〉浸透していったと察せられるところがある。これに対してわが国での近代化に伴う非形式的なタブーは、いわば〈下から〉形成されていったと考えられるのである。

まことに近代人男性は、美を、受動性を、客体性を自ら抛擲し、全面的に女性に押しつけることによって、よく近代的人間像を確立しえたのであった。それにしてもわれわれは高すぎる代価を支払ってしまったのではないだろうか。およそ人格の安定と豊饒さが、異質なるもの、一見両立しがたくおもわれるものの共存と統合に求められるとするならば、それゆえに近代型男性アイデンティティは、かえって貧困窮屈、脆弱不安定なしろものになってしまったのではないだろうか。近年ようやく男性の危機、男らしさの終焉を叫ぶ声が目撃される。われわれの後期産業社会におけるとどまることを知らぬ大衆社会化・管理社会化の進展は伝統的な男性の役割を危胎に頻せしめ、古い世界にあって男性を導いて来た指導理念を、時代錯誤的なものにしてしまった。「男の危機は、男が世の中で男らしく活動しようと思えば、男らしい仲間が少ないために次第に自分の地位を失わざるをえなくなっているということのうちにある。この危機は実際には、次第に多くの男たちが、かなりの地位を保障してもらって代償として自分自身の独立を何の抵抗もなく売り渡している、という事実となってあらわれている。自分自身の創案した道具や武器や機構のために、大多数の男たちは、男らしさから身を引き、男らしさが降伏せざるをえないところに追いこまれている。こういう状態の中で、今日に生きている男たちの大部分にとって、昔からの男の役割の持つ妥当性は失われ

てしまった。」(ベトナリック『男の危機』)⁽⁴⁴⁾「旧石器時代からついこの間まで最高の美德とされていた男の幾多の特徴、当時は高度に熱狂を解発する作用のあった《祖国なくして何の正邪ぞ》といった幾多の標語は、今では物を考える人なら危険だと思うだろうし、ユーモアを解する人にはこっけいに思われるのだ。」(ローレンツ『攻撃』)⁽⁴⁵⁾「大多数の男たちを教育した、あるいは今後とも教育し続けてゆく指導理念は、今の私たちの社会ではもはや実現の可能性のないものである。古い指導理念によって教育され、それを守る義務があると感じている男は、実際生活では絶えず重大な葛藤状態に陥るしかない。」(ベトナリック、同上書)確かに男の役割の変るのと同時に女の役割も変わったように見える。しかしこれは「母性の制限ということを別にすれば、人間としての存在の拡大という方向で変わったのである。逆に、古い男の役割は制限され、のみならず実にあぶなかつい存在になってしまったように見える。別に新しい役割がそれに代って現われたわけでもなく、また、同じ安全性と自信とをそなえた新しい指導理念が一般的な責任を呼びさましたというわけでもない。」(同上書)かくして女性の役割と、人間としての諸可能性は、言いかえれば女性としてのアイデンティティは、しだいに上げられてゆくに対し、男性のアイデンティティは縮小の一途を辿る。等しくアイデンティティ混乱の渦中にあるにもかかわらず、未来を所有する女性は真摯に自己を問いおびたしい〈女性論〉を産出し、対照的に未来なき男性はおのれの危機に眼をそむけ、ヤクザ映画の主人公やスポーツ選手の裡に、喪われた指導理念を〈代用理想像〉として投影する。巨大機構の中の一個の歯車と化した彼の男性としての仕事はもはや自己実現のふかい要求を充たすことがなく、灰色の日常のくりかえしの裡にひそかな女性羨望を芽ばえさせ、女はいい、自分ら男は一生あくせく働いて家族を養わなければならないといった、前代の男をも現代の女性をも啞然とさせるであろうような新論法を發明する。――男性の危機をもっぱら能動性や〈力〉といった男性性の制限と価値低落に由来するとみるこの種の見方に立てば、男性の危機とは資本主義が高度の段階に達したこの数十年に速度を速めたものであり、その起源はせいぜい産業革命の時代まで遡ることができるだけである。しかしながらわれわれが見て来たように、男性アイデンティティの制限と縮小傾向は、西洋においてはすでにキリスト教的中世の幕開きと共にその兆を見せ、〈美〉や客体性からの、すなわち〈女性性〉からの全面撤退という形で16・17世紀からとみに著しくなっていたものであり、これが現在の危機を一層救いがたいものにしてしているのである。ギリシア型男性アイデンティティが豊かに蔵していた〈女性性〉を抛擲し、しゃにむに〈男性性〉のみを追い求めて来た近代人男性は、いままた男性性があらがいがたい力によって掣肘を受け実現不可能なものとなるに及んで、退路を絶たれにちもさちもゆかず立竦んでいるのである。

おのれの〈力〉に自信を喪った男性が、郷愁をこめて〈美〉をふりかえり、誇り高き美の占有者たる女性に対し劣等意識を抱いたとしても、それは当然のことである^(註1)。巨大機構の中に能動性を剝奪され、受動的な歯車と化せしめられた男性が、自らの受動性に見事に適応し、受動性を喜々として享受しているかのごとき女性の生存形式に羨望を抑えがたくなり、ある日から突然女装を始め、女性への化身を冀うようになったとしても、それは当然のことである^(註2)。裸体画のモデルに立つことをやめ、全面的に見る側に回ることによって〈主体性〉を確立しえたと思ふ男性が、女体映像商品の氾濫の中で、〈見ている〉のではなく〈見せられている〉ことに気づき、主体性への途が実は一層ふかい受動性への途であったことを悟るとしたら、それはいよいよ当然のことである。21世紀はかつてない男性の危機、男性アイデンティティの崩壊の時代となるであろう。女性への劣等感、女性に対する羨望意識がなかば公然化し、女性化願望者と女装ボーイが激増するだろう。この種の〈適応〉をよしとしない連中は暴力的反抗の途を選び、理由なき殺人から都市ゲリラにいたる、豊かな社会への絶望的抵抗の試みが、いたる処に展開されるだろう。それはあたかも人類の半分が全体として非行化しつつあるかのごとき景観であり、〈男性問題〉が、現在の婦人問題や老人

問題とは比較にならぬ深刻な様相をもって登場するにいたるだろう。

註1 若い世代にこの種の潜在的劣等感がひろまっていると察せられるひとつの証拠が、現代少年マンガの傾向たる〈ハレンチマンガ〉に見い出される。そこでは、女性をあくまでも美しく、かつ大きく表現し、対するに男性の方を、醜くかつ小さく表わすという描写法が例外なく採られているのである。また、女権が伸長すれば自ずと男性美も復興するだろう、などと楽観することも、すでに述べたように女権と男性美との間に歴史的平行関係が何ら認められない以上、不可能なことであろう。現に、今世紀に入って女権は着々伸長しているにもかかわらず、男性美の方はさして復権しているとはいいがたいのである。

註2 第1節において論じられたとき真の異性化願望とは別に、この種の仮性異性化願望とでも称すべき現象が、今後いよいよ多くなるであろうと私は予想している。また、ついではあるが、ポーヴォール(11)によって引用されているハヴロック・エリスの調査を始めとして、「いま一度生れるとすれば、異性に生まれ変わりたい」という種の回答が男性よりも女性の側に多く見られるといった類のテスト結果は(わが国での文献については柏木恵子『現代青年の性役割の習得』⁽⁴⁶⁾を参照のこと)、全く信頼するに足らぬものであることを強調しておきたい。なんとなれば、男性にだけ異装タブーが存するのと全く同様に、男性にだけ、異性に生まれ変わりたいと公然と表明することのタブーがあるのであり、それがテスト結果を完全に歪めてしまうと考えられるからである。

ギリシア型男性アイデンティティとギリシア的愛 greek love があらたな意義をもって喚びかえされるのは、まさにこの時代であろう。ギリシアの女性の不幸は、彼女らが低い社会的地位に置かれていたということによりもむしろ、女性アイデンティティの領域が男性のそれに比べはるかに狭いものであったということにある。今日起りつつあることはその逆のことであり、逆ギリシア現象とでも言うべきものであり、男性のアイデンティティはすでに女性のそれに比べ相当縮小してしまっただけでなく、分裂し、解体しかけてさえいるのである(図1参照)。まさにこのことが、

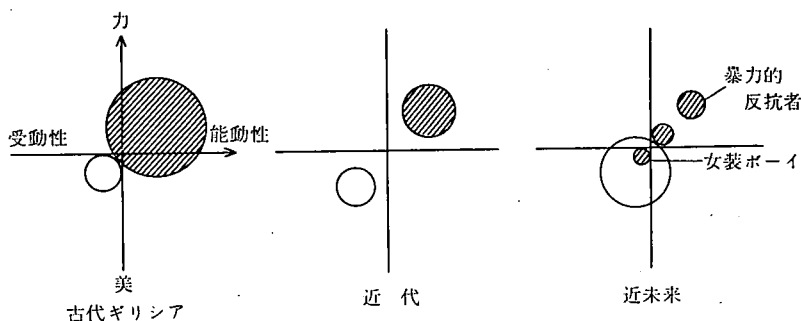


図1. 男女のアイデンティティ領域の変遷 (●♂, ○♀)

男女の社会的地位の相対的關係如何にかかわらず、男性の側に激甚な欲求不満と一般的な不幸感を喚び起させ、やがては女装や暴力的反抗を、真に生きようとする男性よっての二者択一の途としてゆくだろうところのものなのである。だが、ギリシア的愛の復権はこれらの男性に、男らしさと美しさが、男らしさと受動性が、何ら矛盾することなく共存し統合されるものであることを教えてくれるであろう。女装せずとも美を追求し美を体现することは可能であり、女体に化生せずとも受身的エロチズムを享受することは可能であることを教えてくれるであろう。そのみか武装ゲリラ戦の指導者と女装ボーイとが、一個の人格中に共存し統合されることさえ可能であることさえも、教えてくれるであろう^(註)。

註 じっさい、アルキビアデスやシーザーのごとき古代世界の名将が、男色関係においては〈女役〉であったことはよく知られた話である。

まさしくこの点にこそわれわれの、同性愛研究の意義が存するのであり、なにかんづくギリシア的愛の概念の深化と、その、近代社会の裡における具体的な様相と実現可能性の追究の必要が存する

のである。私はこのことを後続の諸論文において、様々な角度から試みてみようと思うのである。従来までの〈同性愛の歴史〉に代って、〈同性愛タブーの歴史〉が書かれなければならないであろう。また、患者の〈症例〉を報告するという通例性倒錯研究に採られている方法は、私が現在までのところいかなる意味でも臨床家ではないという理由によってさしあたり度外視されることとなるが、おもに従来までの同性愛研究は、うちひしがれ医学や犯罪学の対象となるにいたった、社会によって異常化された同性愛者を主たる材料に用いるという点で、理論構成上はなほだ偏向したものであっただろう。同性愛を理解するには、最低水準だけでなく最高水準をも、すなわちレオナルドやミケランジェロ、ヴェルレーヌ、ホイットマン、ワイルド、ジッド、プルースト、南方熊楠や折口信夫等の文化的巨人をも視野の内に収めなければならない。それゆえ、〈中間水準〉の人びとを対象としたフィールドワーク的研究の他に、現代の幾人かのすぐれた芸術家の生涯と作品の研究が私の計画のかなりの部分を占めることとなるだろう。また、言うまでもないことであるが、この際、因果的還元説は考慮の外に置かれることになるであろう。ある人間の同性愛とは、たとえば精神分析的三島由紀夫論に往々にして見られるごとく、彼が独占欲の強い祖母に育てられたといったことに帰着され説明されるべきものではなく、彼がその内面にあっていかなる美とエロスの理念をはぐくんでいたか、そして彼の生涯を通じていかにそれを実現しようと企てたか、という観点から記述され理解されなければならない。そのような、いってみれば現象学的記述と理念的説明によってこそ初めて、男性の存在可能性に強力な制限を加えているところの見えざる権力の構造とその具体的な作因の諸様相が、明瞭に記述され輪郭づけられるであろう。そうしてそのような作業を通じてこそ初めて、近代産業社会における男性のエロスの、おそるべき鉄鎖につながれた状態が浮彫りにされ、女性のそれに比べ $\frac{3}{4}$ 世紀は遅れを取ってしまった男性のエロスの解放への視界が、拓かれることとなるであろう。

文 献

1. ヴィンケルマン, J. J. (1755): ギリシア美術模倣論. 沢柳大五郎訳, 座右宝刊行会, 1976.
2. Stoller, R. J. (1968): Sex and Gender. New York, Science House.
3. Pauly, I. B. (1969a): Adult Manifestations of male Transsexualism. In R. Green & J. Money (eds.), Transsexualism and Sex Reassignment. Baltimore, John Hopkins U. P.
4. Pauly, I. B. (1969b): Adult Manifestations of female Transsexualism. In R. Green & J. Money (eds.), Transsexualism and Sex Reassignment. Baltimore, John Hopkins U. P.
5. Zax, M. & Cowen, E. L. (1976): Abnormal Psychology: Changing conceptions, 2nd ed. New York, Rinehardt & Winston.
6. Freud, S. (1932): New Introductory Lectures on Psychoanalysis. In The Standard Ed. of Complete Psychological Works of S. Freud, Vol. 22. London, Hogarth P., 1964. (フロイト選集 3. 古沢平作訳, 日本教文社, 1969)
7. 土居健郎 (1971): 甘えの構造. 弘文堂.
8. Balint, M. (1965): Primary Love and Psychoanalytic Technique. New York, Liveright P.
9. ミード, M. (1949): 男性と女性. 田中・力藤訳, 東京創元社, 1961.
10. グリーンソン, R. R. (1967): 現代における男性性と女性性. 望月衛訳, 性の諸問題 (C. W. クール編, 望月衛監訳) 所収, 誠信書房, 1971.
11. ボーヴォアール, S. de (1949): 第二の性. 生島遼一訳, 新潮社, 1959.
12. マルクーゼ, H. (1956): エロスの文明. 南博訳, 紀伊国屋書店, 1958.
13. Corraze, J. (1969): Les dimensions de l'homosexualité. Toulouse, Privat.
14. Foucault, M. (1976): La volonté de savoir. Paris, Gallimard.
15. Freud, S. (1905): Three Essays on The Theory of Sexuality. In The Standard Ed. of The Complete Psychological Works of S. Freud, Vol. 7. London, Hogarth P., 1953. (フロイト選集 5. 懸田克躬訳, 日本教文社, 1969)
16. プラトン: 饗宴. 鈴木照雄訳, プラトン全集 5 (田中・藤沢編) 所収, 岩波書店, 1974.
17. Freud, S. (1914): On Narcissism: An Introduction. In The Standard Ed. of the Complete

- Psychological Works of S. Freud, Vol. 14. London, Hogarth P., 1963. (フロイト選集 5. 懸田克躬訳, 日本教文社, 1969)
18. Kinsey, A. C., et al. (1948) : Sexual Behaviour in the Human Male. London & Philadelphia, Saunders.
 19. ウェスト, D. J. (1968) : 同性愛. 村上・高橋訳, 人文書院, 1977.
 20. Terman, L. M. & Miles, C. C. (1936) : Sex and Personality. New York, McGraw-Hill.
 21. Benjamin, H. (1966) : The Transsexual Phenomenon. New York, Julian P.
 22. Knorr, N., Wolf, S. & Meyer, E. (1969) : Psychiatric Evaluation of Male Transsexuals for Surgery. In R. Green & J. Money (eds.), Transsexualism and Sex Reassignment. Baltimore, John Hopkins.
 23. Levine, E. M. (1976) : Male Transsexuals in the Homosexual Subculture. American Journal of Psychiatry, 133, 1318-1321.
 24. フォード, C. S., ビーチ, F. A. (1951) : 人間と動物の性行動. 小原秀雄訳, 新潮社, 1967.
 25. Daniel, M. et Baudry, A. (1973) : Les homosexuels. Tournai, Casterman.
 26. プルターク英雄伝. 河野与一訳, 岩波文庫 (全12冊), 1952-1957.
 27. ペトロニウス: サチュリコン. 岩崎良三訳, 世界文学大系64, 筑摩書房, 1961.
 28. 岩田準一 (1973) : 本朝男色考. 鳥羽市, 岩田貞雄発行.
 29. 岩田準一 (1973) : 男色文献書誌. 鳥羽市, 岩田貞雄発行.
 30. 西山松之助 (1959) : 衆道風俗について. 講座日本風俗史別巻3 (性風俗3) 所収. 雄山閣.
 31. 山崎正夫 (1973) : 三島由紀夫における男色と天皇制. 東京グラフィック社.
 32. Feinbloom, D. H. (1976) : Transvestites and Transsexuals. Seymour Lawrence, Delacorte P.
 33. アイブル=アイベスフェルト, I. (1970) : 愛と憎しみ. 日高・久保訳, みすず書房, 1974.
 34. ヘンリックス, F. (1959) : 性の社会学. 卷正平訳, 紀伊国屋書店, 1963.
 35. クラーク, H. (1956) : ザ・ヌード. 高階・佐々木訳, 美術出版社, 1971.
 36. プラトン: アルキピアデス I. 田中美知太郎訳, プラトン全集6 (田中・藤沢編) 所収, 岩波書店, 1974.
 37. ホイジंगा, J. (1919) : 中世の秋. 堀越孝一訳, 中央公論社, 1967.
 38. バートン版千一夜物語. 大場正史訳, 角川文庫版巻2, 1951.
 39. Eglinton, J. Z. (1971) : Greek Love. London, N. Spearman P.
 40. ジット, A. (1925) : コリドン. 伊吹武彦訳, ジット全集. 新潮社, 1947.
 41. 家永三郎 (1976) : 日本人の洋服観の変遷. ドメス出版.
 42. Eible-Eibesfeldt, I. (1978) : Grundriss der vergleichenden Verhaltensforschung, 5., erw. Aufl. München, Piper.
 43. Sartre, J. -P. (1943) : L'être et le néant. Paris, Gallimard.
 44. ベトナリック, K. (1968) : 男の危機. 福田・井上訳, 読売新聞社, 1971.
 45. ローレンツ, C. (1963) : 攻撃. 日高・久保訳, みすず書房, 1970.
 46. 柏木恵子 (1973) : 現代青年の性役割の習得. 現代青年心理学講座 5 (大西誠一郎編) 所収, 金子書房.

(昭和53年12月13日受理)

(昭和55年1月8日発行)

